

聴覚障害児の現状と新生児期からの支援について

佐藤 恵理子

本論文では、聴覚障害児の新生児期からの支援について考察した。

補聴器を用いる難聴児の多くの教育は、脳に言葉の習得の臨界期があるために1歳以内に行う必要があると言われている。だが、1-2歳でも可塑性があり手遅れというわけではないが、治療時期が遅くなるほど困難が大きくなる。人工内耳埋込術は、脳の可塑性を考慮して1-2歳頃から始めるべきであると言われている。言語発達の臨界期については、「言語発達の臨界期」が意味する時期が曖昧であり、論文の中で正誤を断定することはできないが、聴覚障害児の言語獲得のためには早期発見・早期教育が重要であると考えられる。早期発見・早期治療の観点より、新生児聴覚スクリーニングは有用性があると考えられる。

支援者や聴覚障害児の周囲の人は音声や文字、指文字、手話など多くのツールを活用して、難聴児とコミュニケーションをとることが可能である。聴覚障害児がどのような方法でコミュニケーションを取りたいか・得意とするかで聴覚障害を持つ者同士、聴覚障害を持つ者と健聴者の間でのコミュニケーション方法は変わってくる。それを踏まえて、支援者や教師がどのような対応が良いのか、必要な配慮等について丁寧にアセスメントすべきだと考える。児童生徒に何をさせたいのか、何を学ばせたいのかという指導のねらい等に応じて、日本手話や日本語対応手話を場面ごとに使い分けることが教師に求められる。加えて、こうしたコミュニケーション手段の技術を啓発する社会資源は今後ますますの必要性が叫ばれると考える。

そしてこれらを踏まえ、家庭の事情により、聴覚障害の発見が遅れても、支援をなるべく早期からしていくことが必要だと考える。また、障害児の支援に加えて、我が子の障害の受容に関して家族への精神的な支援も必要だと考える。今後、聴覚障害児の支援に加え、家族や周辺社会資源まで広くサポートしていくことが望まれるという大要を設定した。